

本指導案は、「2018年度 横浜美術館コレクションを活用した授業のための中学校・美術館合同研究会」において
中学校の教員と横浜美術館が協働で作成しました。

横浜美術館コレクションを活用した鑑賞授業

美術・国語科学習指導案

1. 題材名 **「いったいこれはなんだ？」**
～中学生 木村浩《言葉》に出会う～
2. 題材作品 木村浩 作《言葉》
1983（昭和58）年
アクリル絵具、カンヴァス（4点組）
116.6×90.9cm
横浜美術館蔵（木村浩氏寄贈）
3. 実施学年 第1学年
4. 学習指導要領との関連 美術科：B鑑賞(1)ア、イ A表現(1)(3)
国語科：A話すこと・聞くこと(1)エ、オ
B書くこと(1)ア・ウ・オ
5. 本題材について
横浜美術館コレクションの中から、木村浩の作品《言葉》を鑑賞作品に選び、国語科・美術科との教科連携で共有して扱うことにより、①作品鑑賞、②言葉から連想したことを基に「三行詩」創作、③形（文字の形＝フォント）と色の持つ印象や役割を学ぶ、④「三行詩」を基にPCでフォントと色合いを選び表現、という流れで鑑賞から表現へと至る活動を設定した。
木村作品の絵画作品としての意外性を、「いったいこれは何だ？」という題材名に託し、出会った時の疑問に思う気持ちから少しずつ掘り下げ、次第に思い・言葉・形・色彩という相関関係に気づかせていく。その後、国語科「三行詩」の作り方を学ぶ中で、思いを簡潔な言葉の表現にしていけることを体験させる。さらに、ひらがな一文字を選んだフォントと色彩で表現する試行を生かしながら、最終的に「三行詩」を作品にし、木村作品で鑑賞したことをきっかけに、自分自身も思いと言葉と形や色彩を関連づけて表現する体験をし、美術作品や表現することの幅が広いことを知り、身近に感じるきっかけとし、今後、美術を愛好する心情を育むことができるための一つの手立てとしたい。
6. 題材目標（全4時間）
 - (1) 作品に出会い鑑賞することにより、美術作品や表現することの幅が広いことを知り、思いと形（フォント）・色彩などによって感じ方が違うことに気づかせる。
 - (2) 自分が感じたことを言葉にし友達と共有することで、共感したり様々な違った考え方を知ったりしながら、鑑賞したことを深めていく。
 - (3) 国語科「三行詩」の作り方を学び、鑑賞したことをもとに、自分の思いを端的に表現してみる。
 - (4) ひらがな50音から好きな文字一文字を選ぶとともに、選んだ思いにふさわしいフォントと色合いで着色し、思いと形（フォント）・色彩の関係を生かした表現を試みる。
 - (5) 「三行詩」に託した思いがよりはっきりするようなフォント・色合いで構成し、美術作品として表現する。

7. 題材の評価規準

美術科（第1時）

美術への関心・意欲・態度	鑑賞の能力
木村浩の作品《言葉》に興味を持ち思ったことを言葉にしようとしている。	自分で感じたことを言葉に表現するとともに、友だちの意見を聞き共感したり違う考えから刺激を受けたりしながら、作品を味わおうとしている。

国語科（第2時）

国語への関心・意欲・態度	話す・聞く能力	書く能力
身近なことから題材を見つけ、楽しんで3行詩を作ろうとしている。	3行詩の作り方のヒントを、自分が作るイメージを持って聞こうとしている。	自分の見つけた題材を文章に表し、言葉やリズムを工夫して、3行詩にまとめようとしている。

美術科（第3時）

美術への関心・意欲・態度	発想・構想の能力	創造的な技能	鑑賞の能力
文字の意味と形（フォント）や色合いを選ぶことで、伝えたいことがよりはっきりさせられることを知り工夫しようとしている。	ひらがな50音から自分で意味を持って一文字を選び、その理由がよりはっきり伝わるようなフォントと色合いを選ぼうとしている。	選んだフォントや色合いがより美しく効果的に見えるように工夫しながら丁寧に仕上げようとしている。	文字のフォントにはさまざまな種類があることとそれぞれに特長や役割があることを知り、自分の作品に生かそうとしている。

美術科（第4時）

美術への関心・意欲・態度	発想・構想の能力	創造的な技能	鑑賞の能力
三行詩に託した自分の気持ちや思いがフォントや色合いにより鮮明になるように取り組もうとしている。	フォントの形や大きさ、配置の仕方と色合いなどの関係を生かしながら工夫しようとしている。	PCの機能を生かしながら、くりかえし大きさ、配置の仕方と色合いなどの関係を生かしながら工夫し、表現したいことを高めようとしている。	木村浩の作品で感じたり気づいたりしたことを基に三行詩を美術作品として表現しようとしている。

8. 準備

<第1時>

- ・作品の図版（全紙サイズでイーゼルに乗せ鑑賞させる用）、イーゼル
- ・作品との出会いで思い浮かんだ率直な感想を記入するプリント
- ・作品の図版（A4サイズで感想を板書するための表示用）

<第2時>

- ・三行詩作成手順を説明する掲示物
- ・三行詩記入用のプリント

<第3時>

- ・約20種類のひらがな50音が載ったフォント一覧
- ・作品とその文字や色合いを選んだ理由などを記入するプリントまたは画用紙
- ・色鉛筆または水彩絵の具、色彩ペンなど

<第4時>

- ・三行詩を記入したプリント
- ・PC
- ・プロジェクター
- ・プリンター
- ・厚手のA3版白上質紙
- ・作品完成後のふりかえり記入用紙

9. 授業展開

第1時：美術科鑑賞授業 TT<ティームティーチング>で実施。T1：国語科、T2：美術科

	生徒の活動	教師の指導・支援
導入 5分	<ul style="list-style-type: none"> ・木村浩の作品《言葉》に出会う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・何の予告もせず「いったいこれは何だ？」と板書する。T1 ・木村作品のカラーコピー作品（全紙サイズ）をF60号キャンバスに貼り、白い不織布で覆ったものを運び込む。T2
展開 1 15分	<ul style="list-style-type: none"> ・作品を見て思い浮かんだことを口にしてみる。「何の授業するんですか～」「これ何ですか？」「『はい、わかりました』だって～何がわかったの～？」「美術の先生がいるから絵じゃね」「色が変」など、見て直感的に思い浮かんだことや友達の発言から連想したことなどを言う。 ・「ところで、先生これは何ですか？」と、再び発言が出る。 ・それぞれの作品について率直に感じたことをプリントに記入する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒の反応を見ながら、しばらくして『さあ、いったいこれは何だ？』とだけ言う。T1 ・出会った直後に、率直な反応があれば、『ほう』『なるほど』などと、合いの手だけ入れながら自由にどんどん発言させる。T1 ・逆に反応があまりなかった場合には、「思ったこと言ってみてごらん」と促す。T1 ・出た発言、つぶやきは書きとめておく。T2 ・再び「これは何？」という質問が出たら、『先生、これは何ですか？』とT2に振る。T1 ・美術作品であり絵として手描きで描かれていることだけ伝える。T2 ・思い浮かんだ率直な感想を記入するプリントを配布し記入させる。T2
展開 2 10分	<ul style="list-style-type: none"> ・一番に印象的に感じたり気に入ったりしたものを選んでみる。 ・同じ作品を選んだ人どうして意見交換する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・『この中で、気になったり気に入ったりしたのを選んでみましょう』と働きかける。T1 ・「同じものを選んだ人で集まり、意見交換してみましょう」と指示。 ・友達の考えに対して、批判的にならないよう「同じだ」「なるほど～」などの言葉を例示し一定のルールを定めておくように配慮する。 ・意見交換中の各グループに関わり、出ている意見を掴んでおく。T1 T2

展開 3 15 分	<ul style="list-style-type: none"> ・グループごとで出ていた意見を発表する。 ・発表された意見に関連づいたこと、連想して思い浮かんだことなど自由に発言していく。 	<ul style="list-style-type: none"> ・A4サイズで感想を板書するための表示用カラー図版を黒板に貼っておく。T2 ・展開1で出ていたつづやきも含め、作品ごとに板書していく。T1
まとめ 5 分	<ul style="list-style-type: none"> ・題名や作品がどのように描かれているかを知り作者が表現したかったことを想像してみる。 ・この授業の感想を発言する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・作者の名前、題名、4点組であること、キャンバスに油絵の具で描かれていること、横浜美術館に展示されている時の様子などを紹介していく。T2 ・今日の作品との出会いがどうだったか、文字だけ描かれている美術作品に感じたことなどを聞いてみる。T1

第2時：国語科

	生徒の活動	教師の指導・支援
導入 5 分	<ul style="list-style-type: none"> ・本時の学習活動内容を知る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「三行詩を作ろう」学習のテーマを板書。
展開 1 15 分	<ul style="list-style-type: none"> ・最近体験したことや、心によく浮かぶことなど題材を見つけて、短い文にまとめてみる。 学校での出来事、部活動のこと、友達や家族との関わり、などからいくつか題材を書き出して、一つに絞る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒が題材を探すため思いを巡らせているときは、発言を控えて表情を観察する。 ワークプリントを配布する。 表現が苦手な生徒や、題材を見つけにくい生徒にはしばらく考える時間をとってから、ヒントの声掛けをする。
展開 2 15 分	<ul style="list-style-type: none"> ・短い文をもとにして、3行ほどに分け、詩の下書きを書く。 ・詩の工夫を取り入れながら、推敲し、自分の気持ちが表現できる3行詩に仕上げる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・短い文を分かち書きにして、詩の下書きにする方法を、例として板書する。その際、以下のことも言い添える。 <ul style="list-style-type: none"> ■3行にこだわらず、2行でも4行でもよい。 ■句読点は使わず、意味の切れ目や、読むときに間を置きたいところで行を替える。 ■言葉の順序を入れ替えたり、削ってしまったり、繰り返しのリズムなどを、工夫する。 ■「楽しいな」「きれいだな」など直接的な言葉は他の表現を工夫する。
展開 3 10 分	<ul style="list-style-type: none"> ・清書して、友達の作品を鑑賞しあう。 友達の表現の工夫や、感性の面白さに気付き、自分の作品との違いを楽しみ、感想を伝え合う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・机間巡視をしながら、一人ひとりの表現の工夫や、感性の面白さについて、肯定的な感想を伝える。

まとめ 5分	<ul style="list-style-type: none"> 自分の作品について、工夫した点や気に入っている部分などを発表する。 3行詩の掲示発表のしかたのアイデアを出し合う。 	<ul style="list-style-type: none"> 何人かに自分の作品について発表を促す。 作品の掲示発表のしかたを投げかけ、第四時への下敷きとする。
-----------	--	--

第3時：美術科

	生徒の活動	教師の指導・支援
導入 5分	<ul style="list-style-type: none"> 文字や言葉が持つ印象や意味を形（フォント）や色の組み合わせで、より伝わりやすく表現してみる活動であることを知る。 	<ul style="list-style-type: none"> 例を挙げながら、ひらがな 50 音から気に入った一文字を選び、選んだ考えや意味に一番合いそうな形（フォント）を選んだり、色鉛筆で着彩し表現するというデザイン的な表現活動を行うことを伝える。
展開 1 20分	<ul style="list-style-type: none"> フォントはたくさん種類があり、それぞれの特長や役割があることを知る。 	<ul style="list-style-type: none"> 古新聞を活用し、見出しと本文でフォントが違うこととその役割について理解させる。 また、丸ゴシック-PRO など、視覚障害や読み取りが苦手なディスレクシアの方用に開発されたものや、かわいらしくやわらかい印象を持つポップ体のフォントなどについても紹介していく。 この際、同じ言葉を違うフォントで表示しながら、印象の違いや適したフォントなどを共有していく。
展開 2 20分	<ul style="list-style-type: none"> 50 音から自分なりの意味づけをもって一文字を選び転写する。 	<ul style="list-style-type: none"> 約 20 種類のひらがな 50 音が載ったフォント一覧を用意。
まとめ 5分	<ul style="list-style-type: none"> 自分の作品についての感想を記入したり、友だちの作品に感じたことをコメントしたりする。 	<ul style="list-style-type: none"> 相互鑑賞や自分のふりかえりなどを行わせ、獲得した感覚を確かめさせる。

第4時：美術科

	生徒の活動	教師の指導・支援
導入 7分	<ul style="list-style-type: none"> 国語の授業で作った三行詩を、木村浩の作品のように美術作品として表現する活動であることを確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> ここまでの流れを振り返らせつつ、美術作品化することの意義について指導する。 PC で入力していく上での基本的なスキルや注意点などを確認していく。 NHK-E テレ「デザインあ」の画像を用い、フォントの違いによる印象の違いなどを鑑賞させる。

展 開 ① 15 分	<ul style="list-style-type: none"> 三行詩をもとに、フォントや色の組み合わせを選びながら、配置し表現してみる。 	<ul style="list-style-type: none"> 表現が多岐にわたりすぎるため、『読んだとき誰にでもわかるようにしよう』『シンプルな中で形と色で表現しよう』といったように、ある程度の「しぼり」を設けることが望ましい。（完全に自由とさせてしまうと、表現が複雑化し、意味を解読しなければならず、次の展開②で行う相互鑑賞と助言の活動がやりづらくなる可能性があるため。）
展 開 ② 8 分	<ul style="list-style-type: none"> 途中までできたところで、相互鑑賞し受けた印象を基に助言し合う。 助言があったら参考にしたり、他者の作品から良さを学んだりしながら、修正仕上げのための学びをする。 	<ul style="list-style-type: none"> ①フォント②文字の大きさや配置③色合いの3つの観点で意見があれば発表させる。 助言はあくまでも助言で、生かすかどうか自分なりに考えて判断するよう指導。 人数が少ない本学園の場合には全員行すが、40人学級などの場合には、希望者を募るなどの工夫が必要。
展 開 ③ 15 分	<ul style="list-style-type: none"> 相互鑑賞で得たことを参考にしながら、作品の仕上げを行う。 	<ul style="list-style-type: none"> 完成した生徒は報告に来させ、順次印刷に入ることをアナウンスする。 印刷が終わった作品は、壁面などに一括掲示できるなどし、最終的に鑑賞会ができるようにする。
ま と め 5 分	<ul style="list-style-type: none"> 自分の作品や相互鑑賞してみたの感想や気づきを書いたり発表したりする。 	<ul style="list-style-type: none"> プリントに記入させるとともに、数名指名し発表させ全体共有できるようにする。

10. 指導案作成者からのメッセージ

(1) どうしてこの作品を選んだのか（作家や作品に対する思い）

今年度、横浜美術館から提示された作品群の中で、私にとってこの作品は「これも美術作品なの？」という率直な感想を持つものだった。そこに、この作品の魅力があり、題材名を「いったいこれはなんだ？」したのは、鑑賞を通して『どういうことなのか？』という、ある意味謎解きのような活動を行うことで、美術作品に対する親近感が持てるのではと考えた。

もう一方で、勤務校の自閉傾向を持つ生徒が普段つぶやいている言葉と、木村作品のつぶやきのような言葉に共通性を見出し、本学園生徒の学びに適しているのではないかと考え選択した。

(2) 指導案を作る上で、考えたこと、大切にしたこと、配慮した点等

第1時の美術科鑑賞授業は、TT<チームティーチング>で実施し、あえてT1を国語科・T2を美術科とした。授業案の内容からそのあたりの意図を汲み取っていただき、より良い方法を模索していただきたい。

第1時と第2時は2コマ続けて実践したが、第3時・第4時は間を空けてから行った。これは、続けて実践すると「作品づくり」になりかねず、経験と学びが自然な形で心に定着するにはある程度の期間が必要ではないかと考えたからである。

また、「三行詩」をいきなりPC入力で作品化せず、ひらがな50音から一文字選択させる活動を入れることで、フォントの紹介や印象や役割をしっかりと学ぶ場に行けるのではないかと考えた。そのステップを踏んでから表現活動へと進ませ、よく考えた上で意図をもって選択させることを狙った。題材作品はキャンバスに手描きで表現しているので、本来同様のステップを踏むことが理想だが、水

彩やアクリル絵の具で着彩することで、はみ出しや濃さなどスキルによって作品の出来不出来が出てしまい、本来の「鑑賞」授業での学びがぼやけてしまうと考え、PCでの着彩、印刷することとした。今回の指導案には掲載しなかったが、A3版に印刷した作品はラミネートしてパネルに貼り、本学園内に設置し、「森の美術館」という形で他の学年や一般の方々（休日に「海の見えるホール」という施設を貸し出しており、一般の方々が往来する場所となるため）にも鑑賞していただき、社会に開かれた教育課程の実践とした。

(3) この指導案を利用してみたいと思う他教員へ、授業をする上でのアドバイス

本学園は1学級20名定員の少人数教育実践校のため、実際に進める上で、40人学級とは多少の違いが生じることがあると思われるが、各実践者が工夫し実態に合わせて行っていただきたい。作品とどのように出会わせるかということが最も重要なポイントなので、実態に合った方法を模索していただき、指導者相互の財産にしていければと願っている。

(指導案作成：学校法人聖ステパノ学園中学校
美術科担当教諭 金阿彌 勉
国語科担当教諭 西海多恵子)

■作品・作家について

木村 浩 [きむら・ひろし、1952 年生まれ]
《言葉》

1983 (昭和 58)

アクリル絵具、カンヴァス(4 点組)

各 116.6×90.9cm

横浜美術館蔵 (木村浩氏寄贈)

木村浩は 1970 年代後半より「言葉」をモチーフにし、写真、絵画、版画、ビデオなど多様なメディアを使った作品を制作してきました。既存の美術表現の枠にとらわれない展開をみせた「関西ニューウェーブ」と呼ばれる、1980 年代の美術運動を担った作家のひとりです。

カンヴァスに描かれている文字は、創作の過程で作家の脳裏に浮かんだ言葉や、日々の生活で相対する人や作品の鑑賞者に向けた思いを、4 つの印象的なフレーズで表したものです。発表当時の 1980 年代に、出版物に広く使われていた写真植字の書体・アンチック体 (明朝系) とゴナ (ゴシック系) を、絵筆で忠実に再現しています。作品を間近で見ると、文字の輪郭線の揺らぎや筆あとが確認でき、印刷された活字のようでありながら、作家の手で描かれたものであることをあらためて認識させられます。また、書体と配色の違いによって、描かれている言葉それぞれの印象に変化が生まれています。

展示の際は、右から「あ、そうか。」「このことについては、黙っていることにした。」「はい、わかりました。」「心の中で、そっと舌を出した。」の順に並べられます。理解や了承を示す言葉と、自分の本心を胸の内に秘めておこうとする言葉が交互に提示されることで、人間の複雑な心理が端的に表現されています。

(横浜美術館 教育普及グループ)